

フランス郊外映画と『バティモン 5』

——移民たちの住宅をめぐる闘い——

Ladj Ly,
Bâtiment 5: Les Indésirables
(Srab Films et al.)

森 千香子

郊外映画とは何か

フランスの郊外 (banlieue) は 19 世紀後半より工業化が進み、労働者の街として発展した。第二次大戦後にはアフリカの旧植民地から動員された移民労働者の転入が進んだが、1970 年代以降の脱工業化とともに、貧困化と治安悪化が進み、現在では低所得の移民や人種マイノリティが多く住む。2023 年 7 月にパリ郊外で少年が警官に射殺された後、激しい抗議行動が起きた件が大きく報道されるなど「暴動が起きる治安の良くない場所」のイメージが強い。

だが、そのような郊外を舞台にした映画が数多く撮られ、現在では「郊外映画」というジャンルを形成していることは、それほど知られていない。もっとも知名度が高いのはマチュー・カソヴィッツ監督の『憎しみ』(日本公開 1996 年) だろう。パリ郊外の団地で、暴動が起きた翌日の、ユダヤ系、アラブ系、サブサハラアフリカ系の 3 人の若者の 24 時間を追いかけた作品は、モノクロ映像とヒップホップ音楽のスタイリッシュさも相まって、センセーションを引き起こした。そのほかジャック・ドワイヨン『弟たち』(1999 年)、アブデラティフ・ケシシュ『身をかかわして』(2003 年) など有名監督も郊外を舞台に、移民にルーツを持つ著者を主人公に作品を撮った。その一方で郊外団地に生まれ育った「当事者」による作品も増えた。1985 年アルジェリア移民のメディ・シャレフが自身の小説を映画化した『すっげえアーメッドの、ハーレムのお茶』が注目を集め、2000 年代以降、作品数は飛躍的に増加した。アルジェリア移民二世のラバ・アムール＝ザイメッシュは自分の育ったパリ郊外モンフェ

ルメイユのレ・ボスケ団地を舞台に2001年『ウェッシュュ・ウェッシュュ、どうしたんだ?』を撮り、高く評価された。

2006年には「郊外映画祭 (festival cinébanlieue)」が始まり、2023年で第17回目を迎えた(サイトは <https://www.cinbanlieue.org/>)。「郊外映画」といっても、舞台が郊外団地で、移民が主人公である以外はシリアスなものからコメディ、フィクション、ノンフィクションまで内容は実に多様だ。だが共通点もある。それは警察と住民の関係を描く点だ。『憎しみ』も、コメディタッチの『身をかかわして』も、記録映画風の『ウェッシュュ・ウェッシュュ』にも警官の抑圧的な姿が映し出される。

『哀れなる者』から『望まれざる者』へ

パンデミック直前に公開された『レ・ミゼラブル』(2019年)もこうした系譜に位置づけられる。監督のラジ・リは幼少期にマリからフランスに移住し、アムール＝ザイメッシュと同じレ・ボスケ団地で育った。映像制作に関心のある若者を支援する地元のNPO「*Kourtrajmé*」(フランス語で「短編映画」を意味する「*court métrage*」の音節をひっくり返した「ヴェルラン」と呼ばれるスラング)で映画づくりの基礎を学び、以来セヌ・サン・ドニ県の団地を舞台にドキュメンタリーや短編を撮ってきた。2018年には地元モンフェルメイユに、NPO「*Kourtrajmé*」の映画学校版を創設し、後進の育成にも力を入れている。

リ監督の長編デビュー作のタイトル『レ・ミゼラブル』は、ビクトール・ユゴーの原作への目配せだ。ユゴーは19世紀のパリ郊外モンフェルメイユを「レ・ミゼラブル＝哀れなる者」が集まる場として描いたが、リは現在同じ街に建つ団地を舞台に、貧しい黒人住民と警官の緊張関係や、団地界限での人種差別や民族間対立を描き、「現代のレ・ミゼラブル」を映し出した。

同作品は郊外団地で生じる問題や亀裂を描く一方、フランス愛を表現するような要素も含む。たとえば冒頭では、郊外団地に住む黒人少年イサがフランスの国旗トリコロールを身にまとって登場し、ラップではなく、国歌ラ・マルセイエーズを熱唱する。またエンディングで画面に浮かぶのは、ユゴーの言葉(「悪い草も悪い人間もない。ただ育てるものが悪いだけなのだ」)だ。人種や民族に基づいた差別よりも、警官と住民といった立場の違いや貧困によって分断を描いた。その点で『レ・ミゼラブル』は見事なまでにフランス的な作品だと言える。こうした面も含めて同作品は高く評価され、2019年カンヌ映画祭で審査員賞を受賞し、2020年のアカデミー賞でも外国映画賞にノミネートされた。

そのリ監督の長編第2作である『バティモン5——望まれざる者(2024年5月日本公開)』

はやや作風が異なる。社会的な 이슈を派手なアクションシーンやドローンカメラを駆使しながらダイナミックに描く手法や、自分の育ったレ・ボスケ団地で撮影地とし、登場人物に地域住民を多用する点などは共通するが、監督自身もインタビューで述べているように、より個人的な経験に根ざした作品だ。

移民たちの住宅をめぐる差別と闘いの歴史

舞台となる架空の街モンヴィリエのモデルはレ・ボスケ団地で、監督自身がバティモン 5 (5号棟の意味) で育った。同団地は分譲団地として建設されたが、高速道路計画中止によって「陸の孤島」となって、スラム化した。一般に分譲住宅は公営住宅に比べ経済的に余裕のある層が住んでいると思われがちだが、同団地には公営住宅に申請する資格も時間的余裕もなく、条件の悪い住宅を買う以外に住まいを見つけれない弱者が集中した。実際、同団地は2006年失業率42%、世帯平均年収16,770ユーロと国内最貧地区の一つで、エレベーターの停止、排水管の漏れなどの問題が累積し、「Les indésirables = 望まれざる者」の居住地として後ろ指を刺されるようになった。こうしたなか同団地で始まったのが都市再生事業だ。それは巨大団地を取り壊し、小規模団地に造りかえる再開発プログラムで、郊外団地の環境改善を図る良い事業と考えられてきたが、実際に郊外住民にどのような影響を与えてきたのかを、本作は批判的に問う。

問題は、同団地の住民の大半は持ち家所有者だったのに、取り壊された団地の跡地に建てられたのは賃貸住宅のみだった点だ。立ち退きに際し、行政は買い上げを提案したが、提示額は極めて低く、他の物件を買うのは不可能だった。苦勞してローンを返済したのに、再生事業のせいで持ち家所有から借家人に転落する住民が続出し、行政を相手どった裁判も起きた。本作はこうした監督とその家族の経験がベースになっている。一家が住んでいた5号棟は2020年に取り壊され、今は空き地になっている。

主人公のアビは、マリ出身の親をもつ移民2世だ。職場ではシリアから来たばかりでフランス語のうまく話せない難民の家族の世話をし、プライベートでは団地に住む移民を立ち退かせようとする差別的な行政に立ち向かう。彼女は団地住民を組織し、ついに市長選に出馬を決める。ポスターを印刷するお金のない住民たちが、団地の壁に巨大なフレスクを描くなどの選挙キャンペーンの手法は、2018年に米国下院議員に史上最年少で当選したアレクサンドリア・オカシオ＝コルテスの選挙キャンペーンを彷彿させる。『バティモン 5』は、移民たちの住宅をめぐる闘いの歴史の一端を明らかにする、新しいタイプの郊外映画だ。